令和２年度　第２回　大阪府市文化振興会議　議事概要

◆日　時：令和２年７月２９日（水）１３時から１５時まで

◆場　所：大阪府咲洲庁舎　2階　咲洲ホール

◆出席委員：蔭山委員、梶木委員、片山委員、永田委員、中西委員、橋爪委員、春野委員、広瀬委員、藤野委員、

森口委員、わかぎ委員

**【概　要】**

**１　会議の成立について**

（事務局）

・委員11名中9名の委員の出席により、会議が有効に成立していることを報告

（春野委員、わかぎ委員は途中からご出席）

・7月15日付で着任した大阪府文化課長荒木をご紹介

**２　次期文化振興計画の検討について**

（橋爪会長）

〇前回の第1回会議におきまして、府市それぞれの次期文化振興計画の策定について、知事、市長から諮問を受けました。策定にあたっては、スケジュールが非常にタイトであり、より効率的に議論を進めるため、ワーキング部会を設けて集中的に検討することとし、7月13日に、第1回ワーキング部会を行いました。

〇本日は、次期計画の目指す将来像などについて、審議を行いたいと思います。ワーキング部会での議論を踏まえ、事務局にてたたき台を作成していますので、まずは、目指す将来像と基本理念について、説明をお願いします。

（事務局）

　　・「資料3」「資料４」に基づき、「全体」「目指す将来像と基本理念」について、説明

（橋爪会長）

　　　〇時間が限られていますので、一人３分程度で全員に発言いただきたいと思います。

〇補足させていただきますが、目指す将来像「文化共創都市、大阪」～文化が未来を切り拓く～という一番上位の概念と理念の３本柱が示されています。本日は、このあたりのフレームがこれでよいのか、また、言葉遣いについてもご意見いただければと思います。その他全般にも、ご意見があればお願いします。

〇将来像の「文化共創都市、大阪」ですが、今回の計画は2025年度を目途としたもので、大阪で行われる万博のコンセプトとして、「共創、コ・クリエーション」が使われています。

万博で示された大きな方向性を、こういう政策の中にも響かせるべきと考え、言葉を取り入れていますが、他に取り入れるべき概念があれば、ご提案いただければと思います。

〇大阪だけでなく日本各地の人たち、世界の人々とともに新しい文化を作り、ベクトルを共有する。万博には百数十の参加国が見込まれるので、2025年を世界とともに我々が新しい文化を創る年次としたいと思っているので、私としては、共創、コ・クリエーションという言葉を強く打ち出したいと思っています。それがこの将来像という上位概念でよいのか、あるいは代案があれば、ご発言いただければと思います。

（広瀬委員）

〇全体的に共感を持って受け止めました。文化は人が創り、発信し、人が受け止めるわけですから、人が定着するというイメージのことを、どこかに入れられたらよいのではないかと思いました。関西から沢山の人材が流出してしまっていて、受け止める側も、人が少なくなっていると思われます。これからどんどん人口が減っていくわけですから、そういう傾向に拍車がかかっていく気がしています。人がいれば何とか食い止められるのではないか、人が定着して活動ができる、そして芸術を享受できる、というようなことがあってもいいのではないかと思いました。環境づくりであるとか、共生社会、全員参加型の社会というようなところに含まれるとは思いますが、言葉として出ても良いのではないか、そんな感覚を持っております。

（藤野委員）

〇前回のワーキングも踏まえて、重要なキーワードはかなり拾い上げたのではないかと思います。施策の方向性の一つを「文化が社会を形成する」としたことは高く評価したいと思います。その上で「文化がまちを彩る」は、歯が浮くような言葉で、デコレーション、イルミネーションみたいな感じで、好きではありません。また、「文化に触れる環境づくり」について、触れるっていうのは弱いと思います。触れるのはもちろん第１歩としては重要ですが、文化への参加を強めるとか、文化への参加を支える環境づくり、ぐらい踏み込んだ表現にするべきだと思います。

〇一番気になるのは、「みんなで」「あらゆる人々」という言葉が何度も使われますが、それをどうやって実現するのか全く見えない、ということです。実現には、インスティテューション、機構が必要です。場所であったり、人とのつながりであったり、また、先行投資を含めて経費が必要です。空理空論というか、「みんなで」「あらゆる人々」という宙に浮いた言葉が躍るのは非常に空疎な感じがしてしまいます。「みんな」というのなら、本当にみんながかかわれるようにするには、どうするのかというところまで、踏み込んで考えなくてはいけない。具体的現実的に踏み込んで、もう少し真剣に文化政策に取り組むべきで、綺麗事だけが浮いているような計画では、全く実効性がないと思います。厳しいことを申し上げましたけれども、やはり本気で取り組んでもらいたいと思います。

（森口委員）

〇アートとヘルス、ウェルビーイングのイギリスでは、全英を9箇所に分けて、各地で専門組織があります。その組織の集合体が来年世界的なシンポジウムを計画していまして、そのシンポジウムの代表とずっと話し合いを持っているのですけれども、その団体が2025年大阪・関西万博に非常に注目しておられるので、なんとか私も繋がせていただくことができればと思っています。

（わかぎ委員）

〇「文化が社会を形成する」ってとても素晴らしい言葉だと思いますけど、書いてあることが全部書類という感じで、具体的にどうしていくのだろう、と思います。全部できるのかとか、全部するために、もう少し具体的なことを書かないのか、という気持ちになります。本当にどうしていきたいのか、大阪らしくしていきたいのか、大阪だからこういう文化もあるとしていきたいのか、それとも大阪以外の人にも波及するようにしていきたいのか、とかいうのが全く見えないので、きれいな言葉がたくさん並んでいて素敵だな、という印象だけです。

（蔭山委員）

〇幾つか行政とやりとりをしてきましたが、今ここに書かれていることは、どこでも言っていることだな、ということなのです。根本的に文化芸術が必要だということを、これだけ長く言わないといけないのか。税金を使うにはこれぐらい説明しておかないと説明しきれないということもあるかもしれないですけれども、世界中でこんなに文化芸術について必要性を説明しなければいけないところは、日本ぐらいではないかなと思います。これは大阪に限らずで、そもそも、文化芸術が必要でなければ、世界中から文化芸術がなくなっているはずなので、必要だというのは前提で、説明は一切いらないのではないかな、という風に思います。

〇もう一つは、結果的には文化芸術は役に立ちますよ、ということがたくさん書いてあります。文化芸術は役に立ちます、つまり本質的な価値そのものに意味があるということよりは、文化芸術が役に立つということが書かれているのですが、こうなってくると、役に立たない芸術は捨てられていくのですよね。その捨てられるものに文化芸術の本質的な価値が実は大きい。メディアアートやビジネスに転嫁できるものは、すごくお金をかけて発表したりするのですけれども、そうではない元々小さいところでやっているものというのは、そういう対象になってこない。注目も浴びないという感じです。これは実質的に文化芸術の価値を下げてしまう、壊してしまうことになりかねないと思います。

〇また、行政はサポートに徹するべきで、行政が「文化芸術はこうありなさい」とか、「こうなんですよ」というアウトプットを指導とか導くべきでない、と思います。大阪府市が文化芸術都市ということで、もっと発展していくということを考えるならば、その価値を生み出していくアーティストたちが大阪に住みたい、大阪で創りたい、そういう風に思えるかどうかです。何かあるものを借りてきて、役に立つものを使って、文化芸術をやっていますよ、ということではなくて、新しい価値を生み出したりするアーティストが、大阪で創りたいと思えるようなまちにするというところを、まず取り組んでいかなければならないと思います。その意味では、文化芸術が持続的に創造活動していける仕組みやあり方、それを行政がどうサポートできるのか、ということを何よりも重点的に考えるべきではないかと思います。新しい概念で、新しい文化芸術都市というものを創っていければと思います。

（梶木委員）

〇私は子どもの遊びのことをずっと研究していますけれども、いま子どもの遊び文化が失われていっている世の中です。地域の中で子どもは遊んでいるのですけれども、その中で、子どもの社会や文化がずっと継承されてきたのが、少子化によって奪われてきている、ということです。ワクワクするものとか楽しいものが、子どもたちの前から少なくなっていますが、ワクワク感や楽しさが伝わるような次期計画であって欲しいと思います。そう考えると、この文章は楽しくないので、ちょっと楽しい感じにしていただけると、いいのかなと思います。文化は人生を彩るものだと書かれていますけれども、暮らしが豊かになっていくものだと思いますので、暮らしが豊かになるというのが、赤ちゃんからお年寄りまで、そして多様な人たちにとっての暮らしということで、プロのプレーヤーさんがたくさんおられて、観る環境も大事なのですけれども、身近な中にもたくさんの文化があるので、楽しい、遊び感覚、遊び感溢れるような、文化政策はもっと身近なものかなと思います。

（永田委員）

〇これは理念のことだと思いますので、ご説明の文言はどれももっともなことで、反対されるようなことはないと思います。実現できたら素晴らしいと思いますので、大事なことは具体策というか、どういうことをするのか、ということになってくると思います。その上で、例えば「文化を享受できる都市」や「多様な文化が交流できる都市」とかですね、そういうもの自体はどなたも反論はないのだと思うのですけれども、それらを実現できているその裏側に、負の部分というか、まだ実現できない否定的な部分がどんどん出てくるのですね。ですので、そういうものも併せて、大阪の文化を見ていく必要があるのではないかなと思います。

〇その上で、文化共創都市というのは、いいのではないかと思います。みんなで文化芸術を共に創る、そういう意味合いも当然生まれてくるのだろうと思うのですが、府民がみんなでひとつのものを創るというのは、それ自体が少し危険で、一種のスタンダードのようなものを想定しているところがあるので、そんなことは思っていないと思いますが、そういう意味合いのものがここに含まれているのですね。

〇もう一つは、共創ということの中には、人間だけじゃなくて、人間が生きている環境との共創という意味合いも含まれているので、今回コロナで災害が起こったわけですけれども、本来人間が自然の中にいて、その中で人間社会の文化やアートができるわけですので、生態系に対する関心もあったらいいのではないか、と思います。

〇多文化交流とか異文化理解とかよく言われているのですけれども、今までずっと言われていて、全然多文化になってない。大阪とか日本も多文化になっていないのではないかと思います。これは本当に通りのいい言葉で、例えば、駅の表札を日本語以外に多言語化すればいい、と理解する人は誰もいないと思うのですが、多文化社会とか、異文化社会というのは、もっとグロテスクな問題をはらむわけですね。文化芸術はそういう問題まで射程に入れて、考えて仕事をするので、そういうところまで含めて理解しておいていただきたいな、と思います。また、私たちはちゃんと理解していきたいなと思います。ですので、これらの文言については、よろしいのではないかと思いますけれども、次のステップが大事かなと思います。

（中西委員）

〇共創という言葉は素晴らしい言葉だと思うので、万博に使っているからではなくて、もっと大きな視点で使うということを了解して進められれば、と思います。ソーシャルインクルージョンみたいな社会包摂型の文化事業も共創という言葉で当てはまると思います。どういう言葉かということをきちんと認識し、よくわからずに何となく使い、次へ進まない方がいいかと思います。

〇「全員参加型」という言葉について、参加したくない人も、ゆっくり自分なりに向き合える社会が文化には必要だと思うので、「全員参加」ではない、別の言葉を使っていただけないか。「文化を通して出会える」とか。

（春野委員）

〇個人的なことになるのですが、家族の介護が始まりまして、元々は、美術館に行ったり、クラシックバレエを観に行ったりということがすごく好きだったのですけれども、やっぱり身体が動かなくなると、一日家で過ごしている。高齢者は今後増えていくわけですし、身体が動かなくなっていって週に何回かデイサービスに行って、それだけでいいのだろうか、ということを自分の問題として思うようになったので、そういう視点で見て行かなくちゃいけない、ということをすごく考えています。

（片山副会長）

〇私もワーキング部会に参加し議論をしまして、だいぶいい感じになったかなとは思っています。まず資料4の将来像・基本理念のところですが、一番上にあるのが文化権の保障で、人としての人権である文化を保障してあげるということ。一番下にあるのが、大阪がどういう社会になりたいかと、いうことだと思います。真ん中の部分が、対外的にどう見えるか、どう発信するか、攻めの部分になっている整理かと思います。大枠で気になるのが、「あらゆる人々が文化を通じて輝ける都市」についてと書かれているところです。これは、輝かなくてもいいのではないか、輝かない人でもちゃんと居場所がある街になることが重要で、輝くという部分はむしろ真ん中のところで強調すべき。さらに輝きたい人がこの真ん中のところで大いに活躍していただければいい。そういう意味でいくと、「人材の育成」とか「地域文化を推進するような人」、「街を育てる」というのは、真ん中に持っていく方が落ち着きがいいのではないか、と思いました。それから、文化を享受できるというところに「文化芸術活動の充実」とありますが、これだと曖昧なので、「文化芸術活動の機会の充実」とかの方がいいなと思いました。

〇理念のところは、だいぶ整理されてきたかなと思うのですが、資料5の1と2について、府市の具体的な施策とのつながりで、まだチグハグなところがあると思います。文化権の保障に対応するところに、府では、例えば「文化資源の保存、継承、活用」とありますが、これは文化権の保障の話とはとても思えないです。市の方でも、例えば「芸術文化を将来に継承・発展させる青少年の育成」とありますが、青少年の学ぶ権利を保障してあげることが重要ですが、その結果、そういうことができる人材になるかというのはまた別の問題です。施策と理念をきちっとあわせて、整理し直す必要があると思います。資料4の理念を整理したので、この理念を実現するためにどの施策が使えるのか、という形で整理して、当てはまらないものは、むしろ要らないのかもしれない、というぐらいの感じで整理していった方が、いい計画がつくれるかなと思いました。

（橋爪会長）

〇各委員からご意見を頂戴しまして、そもそも文化芸術が必要だということを改めて語らなければいけないのか、というなかなか厳しい指摘がありました。従来の計画と今回の計画で変わってきているのが、新しい文化芸術基本法ができ、その下に我々は自治体の計画を作るということになっています。繰り返し法律に示された概念を重複しながらでも記載し、文化芸術の必要性を並べていく必要があるのだろうと思います。

〇また、ご指摘が多々ありましたのは、「あらゆる」とか「みんなで」というのはどういうことか、ということ。万博でもその辺りの議論があって、「一人一人」という言葉をあえて使って、前提として多様であるという姿勢を示しました。皆同じではなく、全員が違うという前提から、「誰もが」という概念を捉えた際に、一人一人がという言葉になるということだと思います。ダイバーシティとインクルージョンを前提とした考え方で、精査していきたいと思います。

〇あとは、大阪らしさをどう書くか、ということ。これまでもいろいろ議論されてきています。現計画では２番目の基本理念で「大阪が誇る」と強調していますが、今回その部分が「多様な文化が交流する」という言葉になり、少し、地域の特徴が薄れている、ということであります。現計画は「文化自由都市」を掲げています。私としては大阪らしさの本質は自由にあり、それぞれ自分のやりたい表現を自由にできる、面白い人が評価されるのが大阪である、ということだと思っています。短い言葉だと難しくて、「面白い都市」というと、お笑いばかりかと思われるので非常に誤解を招くのですが、そうではなくて、ユニークネスを評価するということだ、と申し上げてきました。現計画にある「自由」という言葉に、「大阪が誇る文化力」ということは含まれていると思っていますが、地域独自の文化の振興、あるいは文化的な伝統の保全、保存、継承については、引き続き議論をいただければ、と思っています。

〇各委員からのご指摘については、次回のワーキング部会で議論を深めたいと思っています。

〇次に、施策の方向性と府市それぞれの役割についても、たたき台を作成しています。事務局から説明をお願いします。

（事務局）

　　・「資料5-1」「資料5-2」に基づき、「施策の方向性・役割」について、説明

（橋爪会長）

〇ありがとうございます。先ほどの大きなフレームのもとに、具体の施策の方向性ということで、整理しています。府市それぞれ、ＡＢＣの見出し、タイトルは同じですけど、その下がかなり違っていまして、方向性の内容もそれぞれですので、府のこの部分、市のこの部分というふうに、分けてご意見をいただければと思います。

（広瀬委員）

〇細かいことなのですが、まず、矢印が非常に見にくいですね。別の形で表示していただけた方が、わかりやすかったかなと思います。

〇府の方ですけれども、Ｂ「文化がまちを彩る」のところで、国際文化の交流、多文化理解の促進で、インバウンドに対する文化政策の推進、とありますが、ご承知のように国際間の移動がものすごく難しくなっていて、いつまで続くかわからない。そのような状況で、どういうふうに進めていかれるのか、ということが、具体的にわかるといいな、と思いました。Ｃ「文化が社会を形成する」の後ろですね、「持続可能な地域文化の振興、社会的価値の醸成取り組む」というのが、社会的価値の醸成って、何の社会的価値の醸成なのか、地域文化なのか、全体なのか、それともその前にもある人材育成や支援全てを含むのか、というところが、わかりにくくなっているな、と感じています。

〇それから市の方ですが、Ｃ「文化が社会を形成する」の一番上の「アーティストを支える人材の育成にも力を入れるべきで」は全くその通りだと思います。どうしても裏方でいろいろ仕事をされている方がいるということが、なかなか見えにくいのですが、でもやはりプロデューサーとか技術職の方がいないと、文化芸術は成り立ちません。ですからこれはぜひお願いしたいと思っています。そうすると、その前の「文化芸術を創造する人材（アーティスト）」ではなくて「アーティストなど」とか「アーティストほか」とか、そのような表現にされた方がいいかなと思います。

（橋爪会長）

〇ありがとうございます。インバウンドに対するものというのは、事務局として具体的に何かあるのでしょうか。

（事務局）

〇現在検討中で、この場で具体的にお示しできるものはございません。

（藤野委員）

〇まず枠組みについて質問があります。前回も計画を作ったので、それをフォーマットに作るという手もあるのですが、まず施策の方向性について、これは方針ですよね。大方針がＡＢＣでそれぞれ①②③とついています。その次にあるのが、これは施策ではなく、いわゆる戦略のレベルです。カテゴリ分けがないのでよく分からないのですが、一番左側にあるのが方針なんですかね、普通だったら方針、施策、戦略、そしてその戦略を実現するための手段、言葉を変えれば戦術ですよね。ここに書いてあるのは事業レベルですけども、そういう区分けになっていくと思うのですよ。そうしないと具体化しませんよね。机上の空論になってしまいます。区分けというか段取りがよくわからないので、事務局のお考えを聞きたいなと思います。そしてその一番下の戦術、つまり戦略を実現するための手段、事業レベルでやっていくわけですから、やはり予算と人と仕組みがどういうふうに整えられているのか、ということまで想定しなくちゃいけない、と思うのですよね。そこまで考える基本計画なのかどうか、ということが、今引っかかっている部分です。

〇それから主に橋爪先生にお聞きしたいのですが、今回、万博のことが結構でてきました。府の方で見ると、真ん中のところに「万博のインパクトを生かした新たな文化芸術の創造、国内外への発信」というのがあります。これは「国内外の発信」っていうことは、日本のものを、外に発信するというふうに見えるのですが、万博のインパクトは、一番多感な若い世代に影響が大きく、音楽とか美術面での先端アートの交流というか、外から受ける刺激は、日本を変えていく大きな力になるわけです。「国内外への発信」しか書いていないということは、外からの先端的な刺激は、私たちはもう受けないでいいのでしょうか。人口構造が変わり、人生100年時代で、ターゲットは60代以上70代以上の世代だから、もうそんな大きな刺激ではなくていいということなのか。50年前の万博では、とてつもない刺激を世界から受けて、その後の日本は大きく変わっていったわけです。その辺のところの繋がり、万博のインパクトを、どういうふうにお考えなのかと、いうことをお聞きしたい。

（橋爪会長）

〇まず前段の質問について。全体の階層化で、どういう位置付けになっているのかということなので、施策の方向性がＡＢＣ三本柱であると、これは戦略レベル。次のそれぞれの柱立てがブレイクダウンしたもの。実際の事業、施策に向けては、右のところに列挙しているもの、ということだと思います。

（藤野委員）

〇文字だけが踊っていても何の意味もなく、むなしいだけです。だから、これをどうやって実現するのか、なるべく大きな予算でできるのか、そこを作っていくのが計画なのですよね。そのために、どういう段取りを踏んでいくのか、ということをはっきりさせなければならない、ということです。

（事務局）

〇ご指摘の点ですが、施策の方向性の下に9つの施策を位置付けており、これに今後、具体の取り組みを位置付けていくということを考えていきたいと思っております。施策の方向性は大きな方針であります。戦略に当たるものが、例えばAでしたらこの６つの部分です。戦術ということについては、まだ具体には書き込めていませんけれども、どのように取り組んでいくかということを、今後詰めて参りまして、また皆さんにお示ししたいと考えています。

（橋爪会長）

〇万博の件ですが、私の思いですが、基本的に万博までになすべきことと、会期中になすべきことと、レガシーとして何を地域に残していくのか、それぞれのフェーズごとになすべき事が違う、ということがあると思っています。70年大阪万博の時は、本当に会場の中は前衛芸術の全分野が展開されていた。前例のないものに挑戦する現場っていうのが70年万博での経験値であり、その後の博覧会は、必ずしもそうなっていないのは反省点だと思っています。70年大阪万博では、様々な主体が様々な文化芸術活動を博覧会の期間中、会場の内外で展開していた。多様な主体が関わっていたことが、後に再評価されて、それがレガシーとして残っている。それが70年大阪万博の経験だと、私は整理をしています。

〇今回の博覧会も、実際に2025年にならないと、どのような展開があるかわからないけれども、多様な主体が2025年に向けて、文化芸術の事業や催事を官民挙げて盛り上げていかなければいけない。また、そのなかから残ってくるレガシーがある。2025年での経験で、強い印象を受けて、あるいは博覧会にインスパイアされて、アーティストを目指したとか、表現に目覚めた、みたいな人が湧いてくれば、それがレガシーになると思っています。それは即効性があるのではなくて、5年、10年後に見えてくるものかもわからない。今は世界中から文化芸術の分野で才能のある人が、大阪に行けば活躍して評価してもらえるという街になっているかというと、十分なってない。2025年を節目として、そういう形で、もう一度、文化芸術面で憧れの都市になればと思っています。単に情報発信をするのではなくて、文化芸術分野においても万博を契機にこう変わっていく、という方向性を示していきたい、というのが個人的な意見です。

（森口委員）

〇この頃、子どもの貧困問題がすごく話題になっていると思うのですが、可処分所得が国民平均年収の1/2以下の相対的貧困の中にある子どもが7人に1人という数字もありますし、深刻な問題だと思います。コロナ禍の前で既に7人に1人だったので、今、特に1人親世帯とか、子どもたちというのは、一体どういう状況になっているのか、ということを想像すると、本当に胸が締めつけられるような思いになります。大阪でもそれは例外ではなくて、こういう喫緊の課題に対して、「あらゆる」という言葉をあちこちで使いながら、どこまで本当に考えてくださっているのかなっていうところが、この美しい文章の中には見いだせなくて、非常に辛い感じがするのですが。

（橋爪会長）

〇具体的にどういう支援が必要とお考えですか。

（森口委員）

〇子ども食堂の方々とか頑張っておられますよね。そういうところも文化だと思いますし、相対的貧困の中にある子どもたちは、食文化も含めて、あらゆる芸術文化とか、そういう環境からも阻害されているのではないかと思います。そこのところを、もう少し汲み取っていただけるような施策が感じられれば。世の中の人が感じている危機感とか恐怖感とかリアリティがあまり反映されてないような感じがして、少し残念な気がします。

（わかぎ委員）

〇戦略、戦術については、思っていたことを藤野委員が言ってくださいました。ここに書いてあることを全部実現してもらったら、本当にそれでいい、というぐらい立派なことが書いてあるので、別に文句言う必要がないと思っています。ただ、はっきり申し上げて、大阪が誇る伝統芸能のみんなも、演劇人もアーティストも、みんな個人ではとても頑張っています。申し訳ないのですが、それが、府や市に繋がっていると感じたことはありません。大阪に住んでいるから得したとか、いい感じだった、ということは全くありません、残念ながら。例えば東京公演に行くと、それは多少なりとも感じます。韓国に行ってもものすごく感じます。何故かというと、人が育っているからです。お芝居や絵を見に来る人、音楽を聞く人が、バラバラじゃないからです。みんなが当たり前に、それぞれすべてを感じている人がたくさんいるから、すごく楽しいな、やっていても楽しいな、見に行っても楽しいなと思うわけで。ここに書いてあることを全部実現して、その世の中が来るのであれば、それでいいと思います。だけど、もっとやるべきことをされた方がいいのではないでしょうか。全部できるわけがないと思います。アーカイブ化とか、社会包摂とか、そういうことに特化していった方が、いいのではないでしょうか。

〇劇場音楽施設、文化芸術の創造、活動拠点の充実って書いてありますけど、充実なんか1ｍｍもしていませんよ。府と市に、いくつの劇場と、音楽活動の拠点があるかご存知でしょうか。ほとんどのものが売られ、全部なくなっているのです。稽古場も何一つないのです。そんなところで、若い方が一生懸命、自分達のバイト代を払って稽古しているのです。ここの部屋を貸してあげてください。そうしたらすごい舞台のお芝居の稽古ができますよ。こんな大きい稽古場なんて大阪には一つもない。東京に行ったらあります。ひと月借りられる稽古場がいくつも、それも小学校を潰したりとかしているところでやったりしています。そういう普通なことを考えてください。単純に私が言いたいのはそれだけです。

（蔭山委員）

〇わかぎ委員のお話、その通りかなと思います。文化芸術の街と言いつつ、芸術家にとって魅力のない街であれば、そこに文化芸術は育たないだろうな、と思いますので、そういうところに的を絞って、何か考える方がいいのではないか、と思います。

〇それから、文化芸術と芸術文化という言葉を使われているのですが、そもそもどういうふうに考えられているのか。文化というと、食文化とか、いろいろなところが入ってくるわけですね。そういったことも含めて考えているのか、そうでないとか。そうでないのであれば、どこまで入るのか。あるいは、文化芸術と芸術文化は意味が違うのかなど、その辺が曖昧なので、全部入っているのですね、公共劇場をやっていると、公共劇場で税金を使う、つまり、説明しにくいものに使っているという話になるわけですけども、それで使うのであれば社会包摂をしなさい、という話になってくるのです。確かに芸術が社会包摂に意味があり、役立つ、ということはあります。そもそも芸術はそういうものだからですけれども、でもその部分に文化芸術の予算を使っている。社会包摂はどちらかというと、例えば、福祉とか他の予算があると思います。社会包摂のことを文化芸術でやってしまうと、文化芸術の創造に使うお金が減ってしまう。実態としてそういうことがすごく起こっている。例えば、「観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業」とありますが、文化芸術の側から、役に立つからやってくださいという形ではなくて、それぞれのところが言ってこなきゃいけない。

〇府の方の「文化芸術を支え、育てる府民意識の醸成」について、「みんなで文化芸術を支え、育てる意識や寄附文化の醸成、普及啓発」とありますが、具体的にどうしていくのか。持続可能な文化芸術を支える仕組みづくり、ということで、ヨーロッパのように国が沢山お金を使っているから文化度が高いとか、使ってないから文化度が低い、とは私は思いません。例えば北米では、国からのお金なんてほとんど使っていない。でも寄附が集まるような仕組みが充実していて、寄附を集めるためのファンドレイジングするための専門マネジメント人材を、それぞれのカンパニーに持っているわけです。そこが社会と繋がって、支援していく仕組みがあります。そういう循環していくようなことを作らないと、ただ寄附してください、と言っても、これはみんな出ていくのですね。よく勘違いされるのは、2000人の劇場がいっぱいだったらみんな見ている、500人だったら見ていない。みんな見ていないから、税金を使うのはもったいない、という話なのですけども。府民市民全体からしたら、2000人も500人も同じなのです。どっちも少ない。だからみんなが触れるのではなくて、触れた人はみんなどこかに帰るのですよね。家や職場、学校に帰るわけです。その触れた人が、触れていない人に影響を与えたり、自分の仕事の中で何か発想が出てできたりすることによって、社会全体で共有されていく、ということなのです。みんなが享受できるとなると、誰もが見られて、テレビやインターネットで無料で見られるもの、となるのですね。そこばかり見てしまうことになりますが、そうではないのです。文化芸術の価値はそうではないので、公平・平等性みたいなことをやりすぎると、本質的な価値がまさに失われていくことになります。

○70年万博の話なのですが、私も何回も見に行って、ずっと印象に残っているのは、今でもあるからかもしれないですけれども太陽の塔で、あれはまさに現代アートの作品なんです。説明できないけど何か面白いものとして、現代アート作品に子ども心に触れたので、何かよくわからないものを受け入れるという感覚は多分太陽の塔を見て育ったからだと思うのですけれども、そういうのもクオリティだと思います。高いクオリティに触れた人がそういう気持ちを持って生活していく、芸術にとってもそうで、作品とか、芸術創造活動そのもののクオリティを上げていく、高い次元に持っていけるような環境を作らないといけない。みんなができるっていう風に言ってしまうと、本来の影響力というか、波及力を持たないのではないか、と思います。

〇もう一つ、公共施設をあまりに安く使っていいですよとすると、民業圧迫になってしまう。民間の劇場がしんどくなるとかがでてくるので、公共政策をやるときには民業を圧迫しない、全体を等しく、いい形で発展していけるようなやり方で、料金が安ければいいという話ではない、ということだと思います。

（梶木委員）

〇70年万博の話でいうと、私は、万博音頭を幼稚園で踊らされたりしていて、すそ野まで万博が浸透していたなと思います。小さい子まで全部浸透していたというのは、当時は、いろいろ面白いものがなかった時代だったかもしれないですけれども、本当にワクワクしたということなのです。

〇万博が来ることと、文化施策の話を考えた時に、文化は、まず人を育てるということと、その文化が街を変えていくということがあります。練習する場所がないというのが、それがむしろ増えていったら、街の構造もまた変わっていくというような、集積する街ができるということで、文化のあり方によって街が変わる。文化が社会のシステムを変える、ということで言うと、人と街と社会、そういう切り口での整理もあるのかなと思いました。

（永田委員）

〇皆さんとほぼ同じ感覚、感想を持つのですが、戦術に相当する部分をみると、少し保守的なのかな、という感じがします。理念のところは保守的でもいいのですが、それぞれ具体的にどういうことをやりますか、というところで、今まで言われていたり、してきたことを繰り返しているというか、あまり変わらないのではないか、と思います。もちろん当然しないといけないことなのですけれど。もっと大胆に突っ込んだというか、突出したようなものが、今の時代には必要なのではないかと思います。貧困の問題とか、差し迫った問題、コロナもそうですが、臨界点に立ってきているので、今の大阪が直面している避けて通れない問題にビビッドに対応するような方針を出す必要があるのではないでしょうか。もっと具体的に突っ込んで、例えば「enocoの機能強化」と書いてありますけれども、もっとこういうものを具体性をもって大きく出すとか、実際どういうことをイメージしているのか、わかるようにする必要があると思います。

〇それから、人材育成のところで、アーティストを支えるということと、もう一方、受け手を支える、受け手を育てるということも必要で、その両方が必要なのです。アートや芸術の有効活用とか、どうしてそれが必要なのだ、ということを説明しなければいけない局面に、大阪の文化芸術は立っていると認識していて、それ言っていかなければいけない。文化芸術は、日本では放っておくと非常に脆弱なので、どんどん縮小されていく傾向があると思います。プライベートにやりたい人はいっぱいいて、それを支える人もいっぱいいるのだけれども、日本の全体の制度の中でアートや芸術を支える、そういう制度設計は、ヨーロッパと比べると劣っていると思います。アートや芸術を方便に、ＳＤGsの課題を解決するとか、そういう社会的な実効性のある、その目的を遂行するための方便に使うということの是非は、理解しているつもりなのです。それを府市で行政に携わる皆さんにも共有していただきたい、と思います。それは、イコール文化芸術を受ける人の育成とつながってくるのですね。府民市民の皆さんが、やはり文化や芸術っていうのは、本当に大事なのだ、ということを実感できるような、そういう意見がもっと増えていかなければと思います。そういうことができるように、具体的な戦術を立てていくことが必要なのだと思います。

〇数年前に、難波の精華小学校が商業施設に変わっていった時に、個人的には残念に思いました。そういったことがどんどん府内で起こってくると、全体的なポテンシャルを落としていくし、アジアの諸都市の中でも、いわゆるアート・文化のソフトパワーが相対的にはまだまだ低いのだと思います。伝統芸能、人形浄瑠璃とか文楽は世界遺産になりますとか、それは突出しています。伝統芸能の保存については、日本も戦後すごく早くやったし、アジアや他の国々に比べても非常によくできていると思いますが、それを繰り返してもだめなのです。新しい文化のあり方を考えて、それを基にして70年万博のような実験的なことをやる、ということ府民市民に示す、非常に強いメッセージ性のある施策を提示することができたら、変えられるのではないかと思います。

（中西委員）

〇1点目は、文化政策も含めた施策の作り方とか整理の仕方を、一度メソッド通りにやってみたらいかがでしょうか、というのがアドバイスです。

〇２点目は、府のたたき台で施策の数が増えているのですね。市の方は少し変えたりされています。これを見たときに、府はこれから文化予算が増えて、文化課にたくさん人材配置されるのかしらと思ったのですけれども、そうなのでしょうか。もしその予定がないのならば、数を増やすことでどんどん実現性がなくなるか、どんどん薄くなっていくのかわからないですが、ちょっと考えられた方がよいと思います。コロナのことがあったり、社会的に大変な時に、文化に対して府市がどうしてるのかなって思うときに、皆計画を見ると思いますので、大風呂敷を広げるということよりも、このポイントは絶対やっていく、この部分は今回はできないとか、民間の人に手伝って欲しいんだとか、明らかにされた方が一緒にしやすくなると思いますし、そうならなければならないと思います。

〇3点目は万博のインパクトを生かした文化芸術の創造、国内外の発信ですけれども、70年万博では、万博に参加しなかったアーティストもその時期はとても精力的に作品を作りましたし、万博の中以外にもたくさんの文化が盛り上がったというのが大阪だと思いますので、そういった視点が必要だと思います。例えばですが、万博のインパクトという時にずっと考えていたことは、これから万博までの5年間に、万博に参加するしないにかかわらず、これから絶対伸びると思う面白いアーティストや芸術団体に奨励金を出すとか、あるいは、これから万博までの間に、子どもの活動をしている食堂とかに、アーティストに訪問してもらうとか、万博のインパクトが、万博の中に集約されていくのではなくて、大阪のみならず社会全体、日本や世界にインパクトを与えるような文化の視点からできたらいいなと思います。

〇4点目は、私が追加したA４の1枚ものの資料ですが、自分なりにまとめたもので、今は施策の方向性が3つに分かれていますが、大きく2つぐらいかなと思ったりしています。あと、戦術のところに細かくたくさん書いてありますけれども、これは、横に繋がっていくのではなくて、縦軸でどれかをやっているとか、どれかをやっていないとか、チェックしていくものかと思います。

〇5点目は、評価の話で、質的に評価するもの、数量的に評価するもの、経済効果をはかるもので指標が変わってくるだろうなと思います。あとは、アーツカウンシルは現在、事業評価しかしていないのですよね。事業評価もとても重要な仕事なのですが、実際、規約には施策評価をすると書いてあって、施策評価となると、すごく大きな部分を担うことになるのです。アーツカウンシルという組織を考えるときに、施策評価もするということになっているならば、大きくしっかりした団体として、私の次の方たちが施策の評価にも関わって、機構があることで動いていくこともあると思いますので、そういったことがあればよいなと思って、それがどこかに盛り込めればな、と思っています。

（春野委員）

〇私は元々東京出身で、大阪の春野百合子に弟子入りしたいと思い、たまたま大阪に来たといえるかもしれませんけど、大阪に来てやっぱりすごく自由とか、面白いっていうのはすごく大事っていう価値観とか、大阪に来て自分に合っていたなと思います。大阪が大好きだし、ずっと大阪に住み続けたいって思っていますけど、大阪って文化を大事にしないところだよね、みたいなイメージがあります。それはすごく全国的に広まっていると思います。私はすごく残念で、やっぱりそこを変えていきたいな、というのを強く思います。

〇後は、昔は、浪曲はイケイケだったので、師匠方とか何もせずに、とにかく芸に集中していればよかったのですけれど、今はそういう時代ではなくて、何から何まで自分でやらなければいけない。演劇界とか羨ましいなと思うのですけど、制作さんとか、すごく優秀な方がいらっしゃるので、私達から見たらそれが羨ましいと思うのですよね。いろいろ段取りしたりとか、そういうことができないから芸人になっているのに、そういうことが苦手な人とか不器用な人が埋もれてしまわないようにしてもらったらいいなと思います。

〇市のBの2番目のところ「リアルな空間でのカルチャーの優位性を認めていく」という表現なのですけど、何かすごく気持ち悪くて、オンラインが増えて、それはそれでまたいい面もいっぱいあります。だけど、リアルの価値がもっと高まっているっていうのはもう当たり前のことで、「優位性を認めていく」って誰が誰にどう認めてくれるのですか、と思います。この文言は少し考えていただいた方がいいかなと思います。

〇あと、寄附文化のところ、私もクラウドファンディングでご支援いただいていて、この辺りはすごく関心があります。大阪は元々そういう文化があったのに、今なくなってしまっている。そこをどうアピールしていくのか。今は皆でストーリーを伝える、ストーリーとして考えるということ、やっぱりすごく力があると思うのですよね。例えば、淀屋橋の淀屋さんとか、そういう事例を今意外と知らなくなっていることとか、あるいは、もっと前のこととかを掘り出してきて、落語とか講談とか浪曲で伝えるとか、ひとつの案として面白いかなと思ったりします。

（片山委員）

〇資料4にある3つの理念が、府市それぞれにおいて、施策の方向性ということで、ＡＢＣになっているわけなのですよね。そこに、真ん中の列の施策がぶら下がっているわけですけれども、この理念に合う施策が全然合っていないのです。例えば、市の「文化に触れる環境づくり」で、寄附文化の醸成とありますが、文化権の保障になっていないですよね。これは全部組み替えなければいけない。前の計画と連動させて、施策をどこかに移せないだろうか、という発想で物事を考えていたらいけないと思います。理念を作ったのですから、この理念を実現するのに必要な施策は何だろうか、ということを入れていく必要があって、そうすると、例えば、市の一番上のところで、アクセシビリティを含む環境整備で足りないことがいっぱいあるわけです。

〇子ども食堂、ということがありましたが、子どもたちにちゃんと文化を享受する権利を保障するというのはやっぱり入れなきゃいけない。でも、市の文化施策としてこれまでやっていた事業にはないとすれば、福祉の方の予算で、それをやってもらったらいいじゃないか、ということを書けばいいのですね。文化芸術基本法第2条第10項に新たに書き加えられた、いろんな分野との有機的な連携というのは、そういうことですね。だから、子ども食堂に来る子どもたちにもそういう機会の対応、つまり、理念を実現するために必要なことを書くことが大事です。障がい者の場合も同じです。府の公立文化施設なんていくつもないわけですよね。だからそれを書くことよりは、民間のホール、劇場、ギャラリーなどが機能強化できるような支援を考える。あと、府のレベルで言えば、広域自治体ですから、府内の基礎自治体が持っている公立ホールはいっぱい充実したものがあるわけですから、それらとのネットワーク化をはかるとか。本当にその目的達成に繋がるような、施策を入れていくということが大事だと思います。その結果、前の計画で行われていたもので、実はどこにも入らない、というものがあれば、もしかしたらそれはスクラップしていいのかもしれない、ということだと思います。

〇体系が大事だという話がありましたが、まさにそうで、3つ理念を掲げたので、それに合う基本方針が、府と市とそれぞれ表現が違ってあるので、それに必要な施策をやっていく。どうしても過去の施策でもなさそうなもの、それはどうしたらいいかということを、ここで議論したらいいのではないかと思います。

〇最後に万博について、府の方の表現で、「文化がまちを彩る」の説明文で、国内外への発信のほかに、他文化との交流促進っていうのがあって、当然外からの文化を受けるということも、あるという風に思いました。

（橋爪会長）

〇ありがとうございました。各委員からご意見頂戴いたしました。

〇時間が超過しておりますので、本日これで終わりたいと思います。ご意見等について、ワーキング部会で反映させながら、次回の会議でまたご意見をいただきながら進めて参りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

―　以上　―